旭川の
ふだんぎ

作る方に廻れ、書く方に廻れ、出す（出版する）方に廻れ

— 橋本　義夫 —

「連なるノチウ」　藤井 忠行 作　2000　北海道新聞旭川印刷工場前

万人（みんな）が文を書き
万人（みんな）が本を出す

ふだん記旭川グループ 73

『今は東のこひしきに……』
旭川東高逍遥歌作詞者「大村正次」の旭川時代

宝塚市
松原勝美

「大村正次」の旭川時代については知られていなかったが、群馬県桐生市で医院を開業されていた彼の三男《注1》と愛知県大府市在住の末娘《注2》の存在を知るに及び、全貌とはいかぬまでも凡そのことが分かったので記してみたい。

先ず「正次」の正式な呼び方は「マサツグ」が正しいとのこと。このことも親族を知ったことで初めて解ったことであり、東高生徒間で付いた綽名が「マス」であり、その風貌、その放つ雰囲気から、姓は「大村」と同じことからも、明治維新の功労者の一人である長州の「大村益次郎」になぞらえたことに由来するものという。

ゆえに彼の娘であることから末娘に付いた綽名が「ヒメマス」とのこと、彼女は苦笑交じりに語ってくれた。どの時代にも綽名付けの名手がいることは、古今東西を問わないのかもしれない。（彼女は昭和二十九年、二年生まで旭川東高在籍）

次いで最大の謎とも言って良い「なぜ富山から遠い旭川に来られたのか？」という疑問については、富山の研究者は「家族疎開」という意味不明な表現をされているが、実際は戦禍から逃れる戦争疎開だったとのこと、以下にその語るところを記す。

終戦間際（昭和二十年八月）の富山市は、立山連峰に発する豊富な水を利用した、水力発電による工業が盛んだったことから、米軍の爆撃対象都市になっていた。その激しさは日増しに高まり、避難命令、強制疎開命令が発令されたり、七月には国民学校が休校となるなど、空襲への緊迫感が生起し、さらに毎日の食糧にもこと欠く状態だったという。

このような状況下で「大村一家」も疎開の決断に至ったものと思われる。そしていよいよ一家の北海道行きが決定するのである。当初「正次」は家族を送り届けたあと、自身は富山へ戻る積りであったらしい。この時、ここに「大村一家」の明暗が出来することになる。

不運の始まり？（彼ら一家にとっては、後々幸運であったか不運であったかは一概に断定出来ないが）は、青函連絡船が昭和二十年七月十四～十五日に掛けて米軍の空襲を受け客貨物船十二隻中六隻が被害を被り、そのの

ち壊滅状態となった。それゆえ青函連絡船は以後運航不能となり、「正次」は富山には、戻るに戻れず、結果として旭川中学の教師として旭川に留まることになる。このことを振り返るに、彼ら一家、家族の一人一人にとって吉と出たか、凶となったか、正に運命の悪戯としか言いようがない。

そして運命の悪戯のもう一つの幸運と言っても良いことは、昭和二十年八月一日～二日未明にあった「富山大空襲」から難を逃れたということである。富山市の市街地のほぼ百パーセントが焼失し死者約二三〇〇人、重軽傷者数約八〇〇〇人に達したという大惨事から逃れられたということである。正に幸運としか言いようがない。

「大村一家」が旭川への疎開に、頼る拠り所としたのは、妻「キク」（彼女は金岡家六女）の年の離れた姉が富山県水橋町出身の池田家に嫁いでおり、当時旭川市三条八丁目で「紅屋呉服店」という店を経営していたところであった（現在は無い）。

旭川に到着した日、その足で「紅屋」を訪ねた際、奥の部屋で凄く年の取ったお婆さん（多分「キク」の姉と思われる）が甕に入った水飴を割りばしに絡めて振舞ってくれた。富山では食べ物が無く、「世の中にこんなに美味しいものがあるのか？と子供心（末娘当時八歳）に感動したのを鮮烈に思い出します」、と後に述懐している。

当時の「大村家」の家族構成は、両親、三人の息子（三人とも優秀でのち医者となる）、そして三人の娘の八人家族であり、渡道時には長男は軍医として出征中であり、次男は金沢大学医局勤務か医学生ということもあり来道せず、三男と三人の娘を伴っての合計六人の渡道であった。

来旭後の「正次」は昭和二十一年四月には正式教員に任命され、旭川での教員生活をスタートさせた。その後の家族の生活は、長女は就職し、次女は中央小学校の教員として一家の家計を援けた。妻「キク」は旭川西高教諭として昭和二十九年三月まで勤めた。ここで「キク」のことについて語っておこう。

「キク」は妻として、母として、職を得て夫、家庭を守ることに専一で旭川では詩作をしてはいない。日常に於いては末娘の日曜学校（六条教会）への付き添いが切っ掛けで信仰の道への発端になったのでは、と想像する。

入信のもう一つの理由として、この頃丁度「更年期」にあったこともあり、日常の体調が勝れず、それゆえキリスト教への信仰を深めていったのでは、とも推察する。その甲斐もなく「キク」はついに昭和二十九年、生まれ

故郷の富山へ戻ることになる。この別離がのちの離婚への伏線となったのであろう。富山へ戻った「キク」は富山新庄教会の会員・長老になるほどの敬虔な信者となったが、不幸にもパーキンソン病を患い、寝たきりになったという。最晩年は医者であった長男の元に身を寄せていたという。そして昭和四十九年八月十三日、その一生を終える。

末娘はその一生を偲んで「伝聞では、石動（いするぎ）で広い料理旅館を借りて住んでいた頃、井上靖さんなど、大勢の人が入れ替わり立ち替わり客として来られ、母はその接待に大童、でも料理の先生でしたので、上手にもてなしたようです」と語っている。

また、昭和十八年～十九年、富山県庁の栄養技師（部長待遇）であった頃、官選知事であった「町村金吾」（終戦後、のち北海道知事、道民には馴染みの深い名）に見い出され日本で初めての学校給食を取り入れた功により、叙勲の栄誉に浴したとのこと。

彼女の別の一面、詩人「大原菊子」（「キク」の筆名）の短詩をここに掲げ、御霊を慰めたいものと思う。

のみの音

大原菊子

朝日の裏庭で
鑿（のみ）をうつ音がする
何かしら働きたいと
はだしで水を汲んでゐる。

朝の教室の
白いカーテンの
ちょっとの隙間をみつけて
朝日がのぞいてゐる。
みんな美しいお下げなので
どの眸もよろこびに輝いている。

ゆふべ泣いてゐた未亡人が
けさ、朝日のなかで
子を背負ひ乍（なが）ら
せっせとあらひものをしてゐた。

（昭和四年「日本海詩人」発表）

一方の「正次」は、校内にあっては授業の傍ら、生物部顧問、生徒会指導などの教務をこなし幹部教員の地歩

を固めていったが、三男は医者になるべく上京、長女、次女も結婚で親元を離れ、三女は母を慕って富山へとそれぞれ巣立っていき、昭和三十年頃には一人で生活することになる。我々入学時の三十二年には、彼の身辺に家族の姿、匂いが感じられ無いのはそのためだったのだろう。

家庭にあっては「正次」は、「地震・雷・火事・親父」と古諺（こげん）にもあるような怖い存在でもあったが、娘三人の家庭であってみれば、反面優しい一面を見せたらしい。のちに娘たちが父のことを愛おしく語っている。

やがて「正次」は昭和三十八年、旭川を去ることになるのであるが、旭川における十八年間については、「逍遥歌」以外、表立っては詩作を行ってはいない。富山時代の詩人としての事績を知らなかった生徒には「逍遥歌」で十分であり、それ以上は望むべくも無い。

富山では昭和三十八年、富山女子校に職を得、さらに四十二年、藤園女子高に転ずるが、詩作は殆ど行わず、「大村清風」の号で書道月刊誌「臨池」に漢詩を発表、漢詩への傾倒はかなり以前からのようで、この明治人の文学的教養は、漢学に根ざしていたことが伺え、興味深い。ここに、富山に帰郷後、旭川時代に大雪山に登ったことを懐かしみ、詠んだと思われる漢詩の一首を掲げてみよう。

仰二大雪山一

大雪神秀冠二道央一
雲峡豪壮石水長
豁達清新不退骨
雪容玲瓏摩二穹蒼一

（読み下し文）

大雪の神秀道央に冠す
雲峡の豪壮石水長し
かっ達清新不退のこつ
雪容れいろうたりきゅうそうに摩す

（意訳）

大雪の高く秀でた峰が、北海道の冠のように道の中央にそびえ立っている。

層雲峡の断崖の豪壮なかまえも素晴らしく、石狩の水は遥かに長く道の枢要を貫いて流れている。

開けっ放しで、すがすがしく、その不退転の骨柄は、おのずから道民の気立てとなり、その開拓精神をも表象している。

みはるかす万年雪の姿が美しく、玉のように光り輝いて、大空の蒼にせまり、さらにみがきをかけている。

「正次」の旭川時代の後半の家族との接点では、昭和二十七年には上京、当時大学二年生で在京中だった三男を伴い、赤坂プリンスホテルで「井上靖」に会っている。「井上靖」との再会の従来通説では、昭和三十年七月、旭川「北海ホテル」ロビーで会ったとされている。僅かな事例であるが家族の証言がある。

そして富山へ戻った「正次」は囲碁と酒を楽しむ生活のようだったが、富山の研究者は最晩年の「正次」の印象を、何故か胸の塞がる思いであったと、または、孤独の自由人として暮らすが旧友にも恵まれないまま、悔恨と自嘲のうち昭和四十九年孤高の詩人として生涯を閉じる、と評しているが、「逍遥歌」の「正次」の存在は、彼の詩集「春を呼ぶ朝」の序詞末尾で童謡「めえめえ仔山羊」の作者藤森秀夫は、ゲーテの詩を引用して「ギラギラ眩しく光るものは、瞬間のための生まれだが、本物は後生までも失われず残る」の言を信じたい。初老の教師と若き在校生が作った「逍遥歌」に込める想いは過ぎし日の憧憬である。

後年不幸にして離婚した「正次」と「キク」は、奇しくも昭和四十九年六月四日に「正次」が、あとを追うようにして同年八月十三日、「キク」が没した。それぞれ享年七十七歳と七十四歳であった。

この稿を締めるに当たり、「逍遥歌」が数多の生徒に歌われ、これからも沢山の生徒に歌い継がれることを思うと、富山市岩瀬の墓所（無常寺）に眠る「大村先生」は「今は東（あつま）（北海道或いは旭川？）のこひしきに……」と思っておられるものと信じて疑わない。

令和二年十月二十日記す

脚注

《注1》三男「大村徹」様
昭和七年生れ、旭川東高卒業。東京大学教養学部理科Ⅱ類を経て、東京医科歯科大学医学部卒業、群馬県桐生市で医院開業。

《注2》三女「古賀（旧姓大村）淳子」様
昭和十二年生まれ。青山学院女子短大卒、愛知県大府市在住。

追記

前七十二号にて「正次」、「キク」の年令差を二歳と推定しましたが、誤りにつき訂正お詫び致します。「キク」は明治三十三年生まれ、四歳差である。